東日本大震災が大学生の生活観・人生観に与えた影響(6)

— 全国 WEB 調査にみる震災から3年目・4年目の様相 —

○木野和代・大橋智樹・松浦光和

(宮城学院女子大学 学芸学部)

キーワード: 震災, 生活観・人生観, 距離

Undergraduates' outlook on life after 2011 Tohoku earthquake (6)

Kazuyo KINO, Tomoki OHASHI, and Mitsukazu MATSUURA

(Miyagi Gakuin Women's University)

Key Words: disaster, outlook on life, geographical distance

目 的

東日本大震災は、被災地の人々にだけでなく、震災に関する報道を見聞きしたり、直接・間接的に被害に遭遇した他地域の人々にも、大きな衝撃を与えたと考えられる。4年経過し、震災経験の風化を懸念する声もあるが、現在も折に触れ、震災後の被災地の現状についての報道が行われており、日常の生活意識や人生観を含め、我々が震災から受けた心理的变化は、長期的に継続する可能性がある。そこで、筆者らは、青年期にある学生たちの生活観および人生観等を、継続的に測定し、その変化の様相を被災地からの地理的距離を考慮しながら見守ることとした。

継続調査に際して、震災後の生活意識に関する自由記述調査を複数地域で行い(木野他, 2012a; 大橋他, 2012), これを参考に、震災後の大学生の価値観を測定するための質問項目を試作した(木野他, 2012b)。本報告ではこれを用いて、2012年度から3年間にわたり収集したデータについて、時間経過による価値観の変化を、地域差も考慮しながら分析した結果を報告する。なお、調査事項には精神的健康の指標も加えた。

方 法

1. 調査対象・手続き: 2012年度調査は木野他(2013)で報告されたものであり、24都道府県に所在する34大学の学生1,992名を対象に、各大学で個別あるいは授業時間中に集団で実施された。18~25歳の者を分析対象とした。2013・2014年度データは、インターネット調査会社に委託してWEBにより収集した。18~25歳の学生を対象に、各エリアから男女50名ずつのデータ収集を依頼した。ただし、全て同じ回答など不適切と考えられたデータ(順に45名, 52名分)は分析から除外した。調査はいずれも各年度の1~2月に実施した。

2. 調査内容: ①大学生の価値観: 木野他(2012b)による項目群(震災観, 人生観, 生活観, 死生観, 安全観, 自然観, 対人・社会観, 地域観の8カテゴリを想定した測定。抽象度の高い表現を用い、また各カテゴリ内で項目内容に多様性を持たせた)からの39項目に、生活観にかかわる具体的表現の3項目を追加した。②精神的な健康: PTSD診断尺度(林, 1995)から使用可能な4項目を採用した。回答は5段階評価により求めた。その他、出身都道府県, 年齢, 性別を尋ねた。

3. 被災地からの地理的距離: 木野他(2013)と同様に、都道府県を被災3県との近接度と地方区分を考慮して6エリアに分け、被災地からの地理的距離の指標とした(被災3県をエリア1, 最遠をエリア6とした)。なお、分析対象は、回答者の所属大学所在エリアと出身エリアが一致する者のみとした(表1)。

表1. 分析対象者数

エ リ ア	2012年度		2013年度		2014年度	
	男	女	男	女	男	女
1	41	109	23	33	25	30
2	90	200	26	21	17	27
3	109	397	36	39	32	38
4	59	70	30	29	28	36
5	67	67	31	39	29	29
6	94	139	36	38	30	39
計	460	982	182	199	161	199

結 果

1. 尺度の構成: 想定された下位尺度構成に従い α 係数を算出した。対人・社会観, 安全観, 自然観, 死生観に関しては、年度によっては十分な信頼性が確認されなかったため、分析対象外とした。これら以外の地域観, 生活観, 人生観, 震災観, 精神的な健康については、一部項目の削除を行い尺度構成することとした(α 係数は.62以上)。各下位尺度得点は、構成項目の評定値の合計を項目数で除算したものとした(得点可能範囲は1~5)。

2. 価値観・精神的な健康度の比較: 年度(3)×エリア(6)×性(2)の3要因分散分析を各下位尺度について行った。精神的な健康については、年度の主効果のみ有意であり、2012年度($M=2.27$)に比べて2013・2014年度($M=2.63, 2.64$)の方が高得点であった。価値観については、4側面に共通してみられた主な結果のみを記す。いずれも年度の主効果(2012>2013・2014年度)、性の主効果(女>男)、年度×エリアの交互作用が有意であった。年度×エリアの交互作用についてそれぞれ下位検定を行ったところ、エリア3~6では年度差が見られた(2012>2013・2014年度。ただし、エリア5の人生観のみ2012>2014年度。震災観の結果を図1に示す)。

考 察

4つの価値観全てにおいて、被災3県(エリア1)およびこの隣接7県(エリア2)では年度差が見られなかったが、これらから遠いエリアでは2013・2014年度の方が2012年度に比べて得点が低いという傾向が認められた。被災地から遠いエリアでは、震災経験に対する学生の意識が低下している可能性が考えられた。

なお、精神的な健康度については、エリアを問わず、2012年度に比べて2013・2014年度の方が不健康度が高く、全体に不健康な方向にシフトしたことになる。WEB上の回答の方が病理的な方向になりがちであることを考えると、これは、調査方法の違いによるものと解釈すべきかもしれない。

しかし価値観では、エリアによって年度差の出方が異なっており、単純に調査方法の違いによるものとは言い切れないであろう。震災後3年・4年と経過し、震災当時に受けた影響の生々しさや、被災地で語り継がれる震災の被害状況や復興の様子を身近に見聞きする頻度が、学生たちの意識の差を生み出しているのではないだろうか。

図1. 年度およびエリアごとの震災観平均